

## QOLを向上させる仕事

ファイザー株式会社 経営革新グループ CI推進部  
金生 良太

2003年8月、私は異業種から外資系の製薬会社に中途入社しました。入社当時の私はMRという仕事を製薬企業の営業職という程度にしか認識していなかったと思います。医療業界におけるMRという職種を説明するのは容易ではありません。薬剤の情報を伝達して適正使用を促進する、この点においては公正であることが求められます。一方で自社製品の優位性を医師に訴求し、競合品との差別化を図り処方促進するというビジネスとしての側面も併せ持つ現実があります。このことは矛盾するのではないのか？私自身この業界に携わる前には、医療は非営利でなければならない、医療関係者が金銭的なインセンティブに関心を示すことは良くないと思っていました。そのためMRの仕事が医師やコ・メディカルの方々と協力して医療の発展に貢献しながら、同時にビジネスとして利益を求めることを理解するには時間がかかりました。

そんな私がどのようにこの矛盾を理解したかという、頭で考えたというより、むしろMRとして医療現場に触れることで、私は理解できたと思います。人の生死、健康は重要で大事なことであることに異論がある人はいないでしょう。医療現場には患者さんの人生がかっている、患者さんの家族の想いがダイレクトにぶつかっている現実があります。人間は健康なときには、日常の変わらない毎日に何の価値も見出せないものです。しかし、ひとたび病気や怪我に見舞われて、日常を失ったらその時に失ったものの大きさを知るのかもしれない。

新人MRの頃、病院を訪問すると、医師の方が患者さんに罵倒されている場面に出くわしました。かなり理不尽なことを言われているようでした。後でその医師に「先生大変でしたね、患者さんは理不尽ですね」と声をかけたら、その医師は私に言いました「それは間違いだよ、理不尽なのは患者さんではなくて、患者さんの病気だよ。あの患者さん本当はまじめで正直な善い人なのだよ、それなのに病気というのは善い人、悪い人関係なしに人の人生を変える、その人の健康を奪う、家族の幸せを奪う、そんな理不尽な目に合っているのだから、その悔しい思いを受け止めてあげるのが、医者の仕事だよ」と教えていただきました。

その言葉を受けて、私ははじめて医療現場における「当事者意識」というものを感じることができました。MRの仕事は「くすり」を通して人々の健康を支えることであり、健康であるということは、その人の幸せだけでなく、家族や友人など周囲の人々の笑顔を生み出す可能性を秘めているし、MRはその責任を担っているのだと思いました。

この経験を通して、それまでとは違う視点で仕事に取り組めるようになりました。

入社当時MRとして私はED(勃起不全)の治療薬を担当していました。EDというのは患者さんの命を奪ったりはしませんが、現代成人の日常生活におけるQOLをいちじるしく阻害するものです。一方でその疾患の特性上、EDの患者さん、特に日本人の男性は自分がEDであることを医師に相談することが恥ずかしく、なかなか医療現場での治療は認知されていないのが現状でした。私はMRとして医師に、EDで悩んでいる成人男性は多く、この疾患はED患者さんのQOLだけでなく、パートナーの方のQOLにも関連することを訴えてはいましたが、なかなか受け入れていただくことは難しい状況でした。どうすればいいか頭を悩ませていたところ、医師から嬉しい話を聞かされました。先生が友人夫婦から離婚の危機を迎えていると相談を受けた際に、その原因のひとつがご主人のEDであつたらしく、その医師は私の話を思い出して弊社のED治療薬を処方していただいたとのことでした。当初、それほどの効果を期待してはいなかったとのことでしたが、再度友人の方が訪れたときには、非常に明るい顔になっており、毎日の会話も増えて、離婚の危機を乗り越えることができたそうでした。医師からも「こんなに友人が喜んでくれるとは思わなかった。」「友人の家庭の危機を救ってくれてありがとう」との言葉をいただきました。

多くの薬剤はその作用を通して身体的な改善を与えるものですが、このように患者様のQOLを改善して、その人の人生に大きなインパクトを与えることもある。MRという仕事は、もしかしたら私たちの思っている以上に人々の幸せにかかわれる可能性を秘めていると思います。くすりの持っている可能性を最大化することがMRの仕事ではないでしょうか？そのために日々、最新のエビデンスを学習し、適正使用を促進する。医療の現場でまだまだ認知されていない疾患の啓蒙を行う。やりがいのある仕事につけたことを幸せに思います。あとは自分自身がこの仕事が長く続けられるように健康でありたいと思います。(MR経験4年)